



大谷崇

otani takashi

仏陀に教えを乞う

二十世紀のヨブ

——シオランの反出生主義——

たしかに、生誕を災厄と考えるのは不愉快なことだ。生れることは至上の善であり、最悪事は終末にこそあって、決して生涯の開始点にはないと私たちは教えこまれてきたではないか。だが、真の悪は、私たちの背後にあり、前にあるのではない。これこそキリストが見すごしたことで、仏陀がみごとに把握してみせたことなのだ。

（「生誕の災厄」）

二十世紀ルーマニア生まれのフランスの思想家、シオラン（一九一〇―一九九五年）の言である。人生を苦ととらえ、四苦のうちに生まれることを入れる仏陀の教えは、たしかにキリストの教えとは異なっている。

近年、「反出生主義」という思想が注目を集

めている。生まれることを害悪とみなし、子どもを生むことを道德的悪と主張する立場だ。昨年は雑誌『現代思想』でも特集が組まれた。最近の流行は、南アフリカの哲学者デヴィッド・ベネターによるところが大きい。彼は英語圏の分析哲学および倫理学の手法を用い、反出生主義を倫理的理論として組み立てた。

ただし、現在の流行とは別に、出生を害悪とみなす考えは古代インド・古代ギリシャから連綿と存在していることも事実だ。その流れに仏教も位置づけられ得るだろう。前述の『現代思想』特集でも、ベネターの主張と仏教の出家修行者の思考の類似性が指摘されている。

シオランは反出生主義者を自称したことは

ないが、その一人のうちに数えられる。「私は生を嫌っているのでも、死を希っているのではない。ただ生まれなければよかったのにも思っているだけだ」(『カイエ』)と言うシオランは、人生および世界を苦と看取し、どうしてかくも苦しまなければならぬのか、原因を問う。それは私たちが生まれたからである、と結論づける。

しかし、自分が生まれないほうがよかったというのと、他人も生むべきではないというのは、別の問題である。もちろんこの二つは強固に結びついているものの、一方から他方への移行にはやはり根拠があるだろう。ベネターが分析哲学および倫理学に依拠するのに対し、シオランは自らの実存を根拠とする。

ここにシオランの弱みもあれば強みもある。弱みとは、普遍的な主張として子どもを生むべきではないと言うのが難しくなることだ。シオランとは異なり、ベネターの議論の意義はここにある。どれほど成功したかはおくとしても、彼は抽象的な議論を構成することによって、反出生主義の普遍的・道徳的正当化を成し遂げた。このために、普段はそのような信念と無縁に過ごしている人たちをも挑発することに成功した。なにせベネターによれば、あらゆる人が子どもを生むべきではないのだから。だから、ベネターの抽象的な議論が実存を軽視しているという批判は、一

方では真実であるとともに、他方では的はずれであると言える。抽象的だからこそ意義がある。

反対にベネターの弱みは、私が生まれないほうがよかったと抱懐するとはどういうことかを、生誕と生存に苦しむことを実存的に掘り下げられないことだ。そして、シオランの強みとは、まさにこのことである。

とはいえ、シオランもそのような根拠がないではない。いわばそれはこの世と苦と悪を前にしたグノーシス主義的根拠である。それは現世とその苦しみの根源たる造物主、悪なる神、存在の贈与に対する反抗だ。この点で彼は旧約聖書中のヨブを思わせる。シオランによれば、ヨブはただ疲労から神に屈したのであって、神の正しさを確信したからではない。苦の世界を作ったという不正、ひいては苦しむ私が存在するという奇跡的不正に對して、彼は反抗する。

このグノーシス主義的根拠から、子どもを生むべきではないという結論が出てくる。シオランにおいては、人間による子どもの再生産の否定は、神による人間の生産の否定とパラレルだ。それは最終的には、生産することの否定、何かを作ることの積極性の害悪の告発と繋がる。

他方では、シオランは仏教等の智慧の伝統によって、反抗の道を克服しようとも試み

る。ここで詳述はできないが、結局、彼は解脱への道において挫折する。彼が解脱の自力的希求に挫折しても、必ずしも他力のほうに向かわないのは、前述の実存的反抗の契機があるからだ。仏陀の智慧は私たちを世界と和解させようとし、私の苦悩を何でもないものとする。シオランにとって、それは唯一の正しい道であるとともに、その正しさに同意してはいけないものだ。ここに苦しみから解放されたいと願いながら、その苦しみに執着する人間の姿を見出すことができる。

実際には、彼はこのような反抗を貫き通したわけではない。ことに音楽を聞くときなどは、彼はすべてを忘れ、反抗も忘れることができたようだ。シオランの多層性とおもしろさはこの辺りにあると言えるだろう。

サン・セヴラン寺院で、パイプ・オルガンの奏する「フーガの技法」を聴きながら、私は何度もこんなことを呟いた。「なるほど、これがわたしのありとあらゆる呪詛への弁駁なんだろうな」

(告白と呪詛)

(おおたに たかし・ルーマニア思想研究者
著書に、「生まれてきたことが苦しいあなたに
最強のベシニスト・シオランの思想」(星海社新書)など。